

小河内ダムと奥多摩湖に来ている。環境学習会報「E26 東京都水道歴史館 見学」に記載したが、この地に来てダムと奥多摩湖を視たかったことを思い出したからである。それは2020年頃、コロナパンデミックから外出自粛が3年ほど続いたことで、すっかり、忘れてしまっていた。「思い立ったが吉日」、とばかり、7月半ば、車で圏央道/青梅インター経由、411号線を走ってきた。事前に多摩川の概要を国土交通省等の HP で復習した。

「多摩川は山梨県の標高1953mの笠取山を水源に、途中多くの支流をあわせ、東京湾に注ぐ延長138kmの一級河川である。上流部は山岳地帯の水干(みずひ=沢の行き止まり)から青梅市の山間部まで、中流部は、青梅市・羽村市から二子玉川・府中付近まで、下流部は二子玉川付近から河口までの3区分が目安になっている。小河内ダムは、上流部の東京都奥多摩町原5番地にある。標高530mに建てられたダムで、貯水湖が奥多摩湖と呼ばれる。貯えられた水は、ダム直下の発電所で発電に使用後、多摩川に放流され、小作取水堰(羽村市西2-4)と羽村取水堰(羽村市東3-8-673)で水道原水として取水され、村山・山口貯水池、玉川上水路等を経て、東村山・境の浄水場、小作浄水場へ送られている。(後略)」、大河内ダムは昭和32年(1957)に完成した。以来、東京の水道専用ダムとして、「東京のみずがめ」といわれている。東京水道史によると、東京都の水源が多摩川から現在の利根川系・荒川系へ移行したのは、昭和39年(1964)頃、多摩川の渇水と東京オリンピックの水不足を乗り切るために荒川の水を東村山浄水場へ緊急導水した。昭和40年(1965)に利根川と荒川を結ぶ武蔵水路が通水し、東京の水源は荒川・利根川系へ移行した。現在、多摩川は東京都の水源としては、2割程度となっている。駐車場に車を止め、奥多摩湖を見ると、水が少ないようだ。案内事務所の近くにいた年配の守衛さんに、「水が少ないようですな。」と聞くと、「そうなんです。湖の中に島が見えるでしょう。私も初めて見ましたが、ここまでの水位低下は何十年ぶりらしいです。」「そうですか、今の貯水位はどのくらいですか?」「毎日の貯水位は事務所前に計測表示があります。今日は40%ぐらいでしょう。それでも春先よりは回復しています。」「平年の平均水位はどのくらいですか?」「70%ぐらいですね。」「とのことだ。守衛さんにお礼をいい、ダム中央付近にある展望塔へ向かう。展望塔に入る。受付の係員さんに、「こんにちは。『ダムカード』をいただけますか?」「はい、どうぞ。」「ありがとうございます。水位がだいぶ低いようですな。」「そうなんです。他の地域は雨が降っているのですが、この地域は雨が少ないんです。」「そうですか。ところで、天端の右岸に車が

が停まっていますが、車で多摩湖畔を走れますか?」「車はダメです。ハイキングコースになっています。」「一周どのくらいですか?」「奥多摩湖の周囲は約45.4kmあります。ハイキングコースは約24kmで、5~6時間程度、短縮コースで湖に架かかっている浮棧橋コースは3時間ほどですが、いまは水位が下がっているので、浮棧橋は使用できません。」「そうですか。ありがとうございます。」「とお礼をいって、2Fの展示室へあがる。ここはダムのジオラマや小河内ダムの歴史がパネルで展示されている。3Fは展望室、ダムの周辺を一望できる。小河内ダムは、昭和13年(1938)に起工式を行った。その後、昭和18年(1943)に戦争での資材不足のため、工事を中止。戦後、昭和23年(1948)から工事を再開、昭和32年(1957)に完成した。工事にあたり、この地域に住んでいた945世帯の人々が移転、建設工事では87名の事故犠牲者があり、19年の歳月をかけてできたダムだ。このダムも完成から69年の歳月が経過している。ダム建設の直接的な要因



大河内ダム/天端



奥多摩湖



大河内ダムの概要説明看板



ダムの貯水位/計測表示

は昭和7年(1932)、東京市が周辺82町村を合併して大きくなり、人口急増に伴い、東京の水源を安定確保する為、多摩川の水を安定して使えるよう、上流部に貯水池を造ることにしたことによる。多摩川上流部の候補地検討の結果、小河内村が選ばれた。その後、着工前の用地買収・補償交渉・住民移転等を行い、昭和13年(1938)、ダム建設工事に着工。戦争による中断があったことから、住民移転は戦前と戦後の2つに分けて実施された。時系列でみると、

昭和11年(1936)事業認可が下り、補償交渉を開始
 昭和13年(1938)補償の合意がなされ、建設工事着手
 昭和12年(1937)～昭和18年(1943)第一次移転480世帯
 昭和18年(1943)～昭和23年(1948)戦争により中断
 昭和23年(1945)工事再開、再開に伴い第二次移転465世帯
 昭和32年(1957)完成

小河内ダムの建設により、多摩川の流量を調節できるようになり、東京の水源は安定した。しかし、再び、水の将来危機が懸念されるようになった。高度成長期(1954～1973)、東京の人口は急激に増加していく、昭和30年(1955)804万人、昭和35年(1960)968万人、昭和40年(1965)1087万人、昭和45年(1970)1140万人、となった。政府は将来の水不足解消策を打ち出した。昭和32年(1957)利根川を東京都の水源にすることを決めた。昭和51年(1976)荒川系が追加された。これらの施策実行により、東京の水道水の主水源は、多摩川から利根川・荒川系へ移行した。現在、東京の水道水の水源としては多摩川の水は2割程度になっているが、かつて小河内ダムと奥多摩湖は東京の水道を支えた。水道の歴史については環境学習会会報『E25 水の起源と水道の歴史を学習する』、で紹介した鈴木浩三 著『江戸・東京水道全史』筑摩書房2025年4月を参照願いたい。

さて、展望塔を出て、駐車場方向へ向かいながら奥多摩湖畔を歩く。駐車場前の道路を挟んだ奥多摩湖側は公園のようだ。「ダム湖百選/奥多摩湖碑」、「ダム建設の歩みと時計のモニュメント」、日除けのある休憩場所等が設けられており、観光客らしき人達がベンチに座り景色を眺めている。私も日影のベンチに座り、しばし奥多摩湖の景色を楽しむ、湖の向こうに奥多摩の山々が見える。『この湖の下に小河内村が眠っている』、ことを思う。村を去るにあたっての村民の想いについては、先の会報『E26 東京水道歴史館 見学』で、小河内村村長 小澤市兵さんと当時高校生の本澤貞子さんの文書を紹介しているので、改めての詳説は避けたい。

しばし休憩後、散策を続ける。近くに、『湖底の故郷碑』・『湖底の故郷歌碑』・『湖底の故郷歌碑建立の辞碑』があった。碑の裏面に歌詞がかかっている。

「夕陽は赤し 身は悲し 涙は熱く 頬濡らす さらば湖底の わが村よ 幼なき夢の 揺りかごよ」
 歌碑建立の辞には次の文書が刻まれている。

「奥多摩湖は1億8千余万屯の清水を湛え毎日数万屯に上る東京都民の用水を供給しえいるが、このダム建設のために、600戸、3000人の小河内村民は、幾千年來護ってきた祖先墳墓の地に永劫の別れを告げることになり、その哀別離苦の心情は洵に切々たるものがあった。

情熱の詩人島田肇也氏は当時の離村民の心境を汲んで歌謡詩『湖底の故郷』を綴った。

鈴木武男氏作曲、東海林太郎氏独唱で発表を見るや湧然として世の共感を呼び、全国的に愛唱されるに至り、村民もこれに依って離郷の悲想を大いに慰められた。

奥多摩湖建設当初から曲折を知る飛田栗山氏の推薦により大方の協力を得て、湖底の故郷の歌碑を此



ダム展望台からの奥多摩湖



ダム展望台から多摩川下流



奥多摩湖/ダム湖百選碑



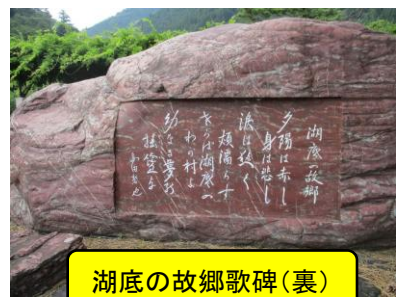
ダム建設の歩みと時計モニュメント

処に建て、離郷民の哀感を永く世に伝えと共に、都民の命水を貯える奥多摩湖が永久に清浄であることを切に記念する。
昭和四拾壹年四月拾日 篇文 奥多摩湖愛護会 理事長 栗島正岡 』

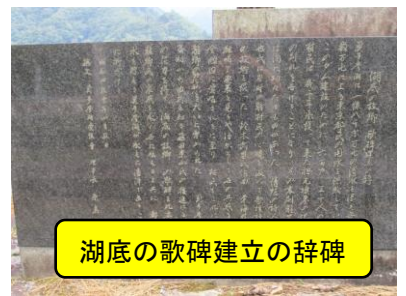
ネットで調べると、『湖底の故郷』の歌は、昭和12年(1937)に発表された作品で、小河内ダム建設により、水底に沈むことになった小河内村の住民たちの想いを背景につくられた、とあった。当時の世相は日本が日中戦争へ向かう戦時下であり、「お国のため」ということで、住民たちは表立っての反対はできない状況にあった。作家の石川達三(1905～1985)が小河内村をモデルにした作品、『日陰の村』新潮社 1937 年を発表すると、社会的な関心を集めた。こうした世情を受け、故郷を追われる人々の心情を代弁するような、『湖底の故郷』の歌が制作されたようだ。歌碑は昭和41年(1966)に建てられた。この背景を更にネットで調べると、「小河内ダムが昭和32年(1957)に完成し、9年が経過し、ダムが安定運用される一方で、小河内村の記憶が社会から忘れ去られていく懸念があることから、元村民の一人であった飛田栗山氏らが中心になり、故郷を失った人々の悲しみを慰め、その絆を繋ぎ止める象徴として歌碑の建立を推進した」、とあった。さらに調べると、昭和41年の歌碑除幕式には多くの元村民が招待され、歌手の東海林太郎のとき67歳、本人が碑の前で、参列者を前に直立不動で歌い、参列者は涙を流したとの記事があった。



湖底の故郷碑



湖底の故郷歌碑(裏)



湖底の歌碑建立の辞碑

「十年ひと昔」、すっかり変わってしまった景色、関係者はここに故郷の小河内村があったことを忘れられないよう、後世に残しかったのだろう。このような歴史モニュメントを残すことは必要なことだ、と思う。

奥多摩湖が何十年ぶりの低水位ということから、過去最大の渇水はいつごろあったのだろうか、と調べてみた。東京水道局のネット情報によると、昭和30年(1955)代頃は、少雨による奥多摩湖の渇水は何度かあったようだ。その内、最大渇水は、昭和39年(1964)に発生、貯水率0.46%、ほぼ底の状態だったらしい。このような状況が東京の水源を荒川・利根川系へ移行することに繋がったのだろう。2026年の水位低下は、小河内ダムとしては、歴史の中で何度か経験している状況のようだ。

その後の状況はどうか、今日では、関東地方のダムの貯水量は、国土交通省地方局が運営する「首都圏の水資源状況」のネット情報で、リアルタイムで知ることができる。8月27日に調べてみると、心配していた夏期の奥多摩湖の水位は、回復していることがわかる。便利な世の中になったものだ。

事例：現在の貯水状況(令和8年8月27日/国土交通省地方局)

関東地方のダム群	有効容積(万 m^3)	貯水量(万 m^3)	貯水率(%)
利根川水系上流 9ダム	36,849	34,115	93
利根川水系鬼怒川 4ダム	14,180	12,806	90
荒川水系 4ダム	6,600	6,693	100
多摩川水系 小河内ダム	18,540	11,798	64
相模川水系 3ダム	22,118	21,633	95

日本ダム協会の集計資料によると、日本のダム(15m以上の構造物)は、現在全国で2762基を数える。国土交通省の資料によると、昭和32年(1957)、特定多目的ダム法が制定され、建設省直轄によるダム建設が進むことになった。最盛期のダム事業は高度成長期(1955～1973)頃で、各地で建設が進む一方で、ダムを巡る社会的紛争が顕在化し、公共事業のあり方が問われ、水没者の補償だけでなく、水源地域の対策が認識されるようになった。昭和48年(1973)に水源地域対策特別措置法が施行された。この法律は国が指定する水源地域において、生活環境、産業基盤等の計画的な整備、併せてダム貯水池の水質の汚濁の

防止等を実施し、関係住民の生活の安定と福祉の向上をはかり、ダム等の建設を促進し、水資源の開発と国土の保全に寄与することを目的とする制度だ。移転住民の生活に配慮した施策は、この法律施行以降になるだろう。ダム建設は自然環境・社会環境に大きな変化をもたらした。これを考える参考文献を紹介する。

ダム便覧に、『文献にみる補償の精神』（小河内ダム・東京都） 古賀邦雄水・河川・湖沼関係文献研究会「これは、財団法人公共用地補償機構編集、株式会社大成出版発行の「用地ジャーナル」に掲載された記事の転載です。として、以下の記事が紹介されていた。

昭和36年(1961)10月25日、昭和天皇、皇后両陛下は、渇水で貯水量が減少した多摩川上流の小河内ダム(奥多摩湖)をご視察された。この案内を務めたのは東京都水道局長小林重一であった。(中略)水道事業の概要と小河内貯水池について、約10分ご説明申し上げたのであるが、とくに渇水で貯水量が減少しているの、給水事業は楽観できないこと、そのため先ごろ、都民に対し、20%の節水を要望したことを申し上げたところ、皇后陛下は大きくうなづかれ、天皇陛下からは説明が終わったとき、はっきりとしたお声で「大切な仕事だからしっかりやって下さい」とのお言葉を頂戴したのである。さらに、小林局長のご説明は続く、二階の廊下に置かれたダムの模型についてご説明を申し上げたが、其の際「移転世帯はいくらか、移転民には十分な補償をしたか」とのご下問に対し、私の「規定に基づき十分な補償をいたしました」との答えに、ご満足のご様子うかがえた。このようにダムの移転補償のことについて、皇族のなかで問われたのは、昭和天皇が初めてではなかろうか。翌々27日両陛下のご視察のご感想が宮内庁を通じて、東京都へ次のように寄せられている。東京都民の日常生活に極めて大切な施設を見ることができて、大変参考になった。現在満水時の三分の一の貯水量の状態を見て、節水の大切なことがよくわかった。将来のため、水問題はさらに研究を進めてもらいたい。(後略)」

もう一つ、【建設時評】2023年7月号「文芸のなかの建設と住民」早稲田大学理工学研究所 招聘研究員一般社団法人 全国土木施工管理技士会連合会 顧問 小林 康昭 氏のコラムを引用し、紹介したい。

「建設事業は、世のため人のためにインフラストラクチャを整備する活動である。建設する地元に恩恵を施すから、地元住民は歓迎し感謝する筈だ。だが、そういかないことがある。地元で犠牲を強い一方で、利益に預かることが少ないか期待できない場合には、必ず地元住民の反対を受けるものである。石川達三『日陰の村』新潮文庫 1948は、犠牲を強いられた地元住民を描いている。(*『日陰の村』新潮社初版は昭和12年(1937)発表)

昭和5年(1930)東京市(当時)水道局は、多摩川の上流で水を堰き止めて大貯水池を造り、小河内村を水底に沈める計画を立案した。

水道局長から説明を受けた小河内村の村長は、即日村議会を招集して、反対する議員一同に対して淳々と、東京市の水道の重要性を説き、大乗的見地に立って賛成することを悟らしめた。

順調なら翌年4月には仮契約が住む筈だったが、それからまる2年、お役所仕事は一向にはかどらず、無為の時日を過ごしてきた。(中略)多摩川下流の神奈川県知事は、昭和8年(1933)、東京市の小河内大貯水池の計画の中止を迫った。東京市は事業を進めることができなくなった。

役場を訪れた村人が「麦を植えても良いか」と相談を持ち掛けても村長は答えられない。立ち退きの時期が決まらなと生活の目途が立たない。地元住民は立ち退きを前提に、家屋の修理を控え、養蚕、施肥、漬物、作付け、農耕、養鶏を放棄し、牛馬を手放した。地元住民は立ち退きまでの間、仮の宿りの生活を送る羽目になった。住民の困惑をしり目に役人たちは言質を与えず明言を避けた。困窮した人々を狙って高利貸しが暗躍し、土地を担保に高利で金を貸し付けた。その借金を返せない。土地は高利貸しの手に移った。それを高利貸しは東京市に高く売りつけた。昭和11年(1936)、事業と起債の認可が下付された。住民は6年間待たされたのである。昭和12年(1937)起工式が挙げられた。土地買収価格が公表されたが、恩恵を受けたのは限られた豪農たちだけで、田畑を取られてしまった貧農たちは得るものはなく、村を出ていった。小河内ダムの建設工事は昭和18年、戦争の激化で、一旦中断し、戦後の昭和23年に再開して、昭和32年に竣工した。(後略)」

石川達三が現地で事実調査をし、書き上げた小説『日陰の村』は、ノンフィクションの草分け的な作品で、社会に問題を提起した。巨額の金で動く開発事業には小河内村のような移転のドラマが、たくさんあったに違いない。自然環境・社会環境を大きく変化した歴史の記憶と教訓を風化させてはなるまい。